

編集委員

機械=福岡照夫 (S26卒) 橋本健治 (S28卒) 石川芳夫 (S34卒)  
 電気=笹本克巳 (S13卒) 田中己晴 (S43卒) 投稿 送り先 西口勝臣 (S47卒)  
 土木=秋月勝美 (S18卒) 榎本嘉信 (S20卒) ㊟273 船橋市山手2-6-2-108  
 工化=松井均治 (S32卒) 柴田孝次 (S34卒) TEL.0474-33-3679  
 建築=若林 衛 (S36卒) 森川浩弼郎 (S35卒)



### 挨拶

関東浪速工業会 会長 岡田 宏三



諸先輩のご指名もあり昨年末の総会にて新会長の大役を仰せつかりました。私は当会が益々和やかで楽しい会になればと願っている一員です。そんなことにお役に立つものであればと僥倖ながらお引受けさせていただきました。何卒、会を活性化させるために皆様の知恵とエネルギー、諸先輩がたの経験を伝授願えれば誠に幸甚です。ご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。

### 新会長のプロフィール

新会長は昭和二十八年建築科卒業で、仕事は建築とは直接の関係は少ないデザイナーです。都工卒業後、京都美大(現京都芸大)へ進み、昭和三十三年卒業、㈱レナウンに入社、独立前はレナウンで昔お馴染みのイエイエ娘のCMも担当しておられた。昭和四十年に独立、現在の岡田デザイン事務所設立、現在は主としてパッケージデザインの分野で活躍しておられる。最近、ヨーロッパで発行されたパッケージデザインの書籍において日本を代表するデザイナーとして紹介されています。

昨年はアメリカのADC賞と並び権威のある日本のADC賞(日本アートディレクターズクラブ主催)を始め、ニューヨークで行われた世界的なコンペであるアメリカPDDCインターナショナルゴールドアワードコンペティションでも見事金賞を射止められた。また、一昨年十二月には日本(青山スパイラル)で開催された国際デザイン会議においてパネリストとして「日本の暮らしの中にあるサイレント性」について発表し、今も生きている日本の文化を世界のデザイナーに紹介されるなど幅広く活躍されています。

(幹事より)

### 平成元年度 関東浪速工業会総会報告

昨年十一月二十八日、大手町「竹橋会館」において平成元年度関東浪速工業会総会が開催された。女性三人を含む大正十年から昭和五十九年卒業の七十八人が参会した。

前年度会長の稲生さんの挨拶のあと、本年度幹事科の建築卒の岡田宏三さん(昭和二十八年卒)が新会長に就任され、固い握手をもって引き継ぎが行われた。

その後、各科ごとに別れて簡単に報告会を行い、記念写真撮影、懇親会に移った。プロのパイオリンとアコーディオン演奏・歓談・校歌・懐かしい歌を年代を越えて合唱し、楽しい一夕を過ごした。

人との出会いは楽しいものです。同窓の知人の輪を広げるためにも皆さん今後蓄ってご参加下さい。若い人から昔若かった人まで参加していますので、気軽にお出かけ下さい。思わぬ人に会えるかも知れませんよ。

(幹事より)



### 五十二年振りの校歌

昭和13年建築卒 鹿山富士夫

平成元年十一月二十八日関東浪速工業会の総会が千代田区大手町の竹橋会館で催された。今年から建築が当番で設営から企画まで建築の若手がやってくれた。過去、各種催しには建築の参加者が少なく何時も残念に思っていたが、今回初めて大勢の参加があったので驚き、旧友達と楽しい一時を過ごさせて頂いた。

大阪から和田理事長や織田校長、石井評議員長をお迎えして五十二年振りに校歌の合唱をしたが、確か昭和13年3月5日の卒業式以来、歌うことの無かった校歌であった。実に懐かしく

### 「思い出」

昭和18年土木卒 北里 直行

私は小学校3年(昭和10年)の時から都工卒業後の昭和19年まで都島仲通りに住んでいた。ですから、都工は私達のあこがれの的であり今と違って上級学校に進める者はクラスで半分くらいしかいなかった様に思う。

その頃、都島周辺は都工を中心として大変活気のある街造りが進められていた。住まいの近くには高瀬染工場があり、関目には相模の国技館があった。

都工への通学の途中には映画館もあり下校時に隠れて日活とか大都、極東映画等を見て

歌詞も完全に忘れてしまっていたが、歌詞のメモを頂きメロディが耳に伝わってくると不思議に声が出た。

感動する事の少ない日常生活の小生にとつて自然に胸がつまり涙で歌詞がうるんで見え、久しぶりに感動を味わうことが出来た。小生の心の中に会場へ行く前に九段の靖国神社で戦死させた部下の霊安られと参拝をさせた感激が心の片隅に残っていたのかも知れない。

本日欠席された会員諸兄は小生とは異なり多忙な日々をお過ごしでしょうか旧友と楽しい一時をお過ごしになって下さい。ときには小生の様に感激される事を期待して是非次回はお出席願います。

楽しんでいたことを思い出しますが、都工での思い出は断片的ですが、戦争が深まるにつれ軍事教練も強化され、樺原神宮までの夜間行軍とか20キロ競争が思い出される。残念ながら戦争で都島周辺は焼け野原になり小学校は廃校となり、再び見ることも出来なくなりました。

今は東京に住んでいるが都島は懐かしい。

### 都島本通り

私が高校進学を考える中学2年の頃担任の先生に、いの一番に都工を希望しました。ところが、返ってきた言葉は「君には無理だ、他の学校を考えろ」と一方的に言われた。私としては兄が都工建築科(昭和43年卒)に在学しており、あこがれを感じていた。こちらも何とか入りたい一心で受験までの一年間は勉強に励み、どうにか昭和42年に都工機械科に入学できた。

私の在学中は世の中が激変し始めていた時代のように思われる。まず一つ、全国的に学生運動が活発になり私達は大学へ行くきたいとは思わなくなっていた。一方、都工においても長髪問題でいろいろありました。丸坊主の私も2年生から髪を伸ばした。もう一つは毎日、守口車庫前から都島本通りまで市電(チンチン電車)にゆられて通学していたがこれも時代の流れか3年生の時(昭和44年)に廃止となった。その後は桜ノ宮駅から環状線で京橋経由で守口へと通うことになった。おかげで、桜ノ宮駅前の天ぷら屋でよく揚げ立ての天ぷらに塩をかけて食べるのが出来た。感謝！感謝！

今では市電の面影はせんせん残っていないが、廃止のときに買って置いた記念乗車券を机の引き出しより出して懐かし眺めている。ちなみに、当時の運賃は二十五円であった。ちょうど二十年まえの事です。

昭和45年機卒 西田 秀嗣



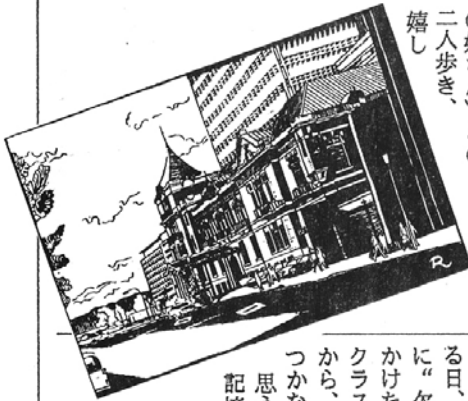
# ざんげ

## 青春時代

昭和36年建築卒 若林 衛

「こらあー若林!、なにをイヤツイテンネン!」の怒鳴り声にハッと振り向くと、ホンダのドリム号に二人乗りで黄色いポロシャツ姿の前島延行先輩の半分羨ましそうで、後は冷やかし半分の顔が夏のカンカン照りの中で笑っているではないか。「きのう東京から従姉妹が来て、いま大阪城へ案内するところですよ」と返事をしたものの、ふと周りを見ると上級生の人達が夏休み中の現場実習で測量している最中、皆の注目の的になり顔が赤くなるやら冷汗は出てくるやらで、「こらあーえらいこっちゃ!」と足早やにその場を逃げ去った事を思い出す。小生が高一で生まれて初めてのデイトの光景である。

生真面目な夏の学生服姿に、かたや相手はまっ白地にブルーの水玉模様ワンピースにつばの広い白い帽子姿でスタイル抜群のマドンナ(父の東京の友人の娘さん)との二人歩き、嬉し



恥ずかしながらも満足感のある日々であった。当時、街にはニールセダカの恋の片道切符が流れ、ジャクリーヌサールの『芽ばえ』の映画が話題を評していた頃の思い出である。

## 帽子と鞆

昭和16年電気卒 戸部 暢

私の都工在校時の思い出として、帽子と鞆がある。これらはある意味では都工生徒の象徴だったと思う。ピアノ線が入ってピンと張った帽子、白い校章の入った黒い肩かけ鞆、その中にハチ切れそうに教科書を詰め込んで、頭には真新しい帽子を冠って登校する一年生。それに対して古びて少々型の崩れた帽子にノート一冊位しか入っていない様なペラペラの鞆を肩にした五・六年生の姿。

この様なスタイルは下級生のアコガレであったと思う。登下校時に道で出会ってもこの点に着目していると敬礼の要、不要の判別がついたものである。がしかし、例外もたまにはある。私が最上級の六年生となったある日、登校時に機械科の五年生に「欠礼した」とタコを釣られかけたことがある。最も、私はクラスで一番のチビッコだったから、帽子と鞆だけでは区別がつかなかったのも無理はないと思う。何故かこの一件だけが記憶に残っている。

昭和13年建築卒大村六郎さんが永年築して製作されています本版の一部を、今回二点のご紹介いたしました。

## 思い出

昭和17年土木卒 日永 善雄

昭和十二年春に大阪市立都島工業学校に入学して以来五十二年余りを経て、歴史に残る事件の記憶も数多く心に刻まれています。都工に入る直前にも二・二六事件があり日支事変が起こりました。そして、都工五年生の時に太平洋戦争に突入しました。多感であった我等の都工健児も長い戦の末の覚悟であり、十七才前後の若人も夫々に決意を新たにしましたものでした。学業途中で少年航空兵に志願したり、上級学校に進学した友人も若干おりました。十七年十二月にあたふたと卒業いたしました。終戦後に入學された方々には全く考えもできない様な都工生達

の様子を記しました。毎日の生活は決して暗い記憶ばかりではなく、むしろ明るく健康的な思い出が多く不思議な経験でした。その中に五年生の時の伊勢神宮参拝行軍がありました。修学旅行の様なもので、百七十軒位の道程を三日間で踏破する強行軍でした。寺田町を出発し桜井市と青山町付近で宿泊して三日目の十五時頃宇治山田に到着した様に思います。途中病気等による落伍者も少数ありましたが車に収容され全員無事に参詣を終えて、近鉄に乗車しましたが殆ど皆が眠りこけたまま終点に辿りついた。最近の若い皆さんも思い出に強行徒歩旅行は如何ですか。

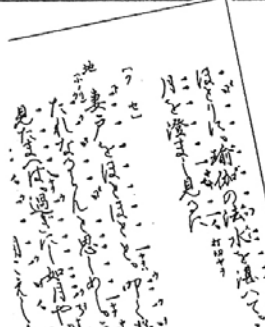
## 頃日所感

演能本浄書にあたって 昭和32年工化卒 水野 栗原

昨年十二月末、国立能楽堂で復曲能「舞車(まいくるま)」が上演された。五百年來演じられたことがなかったこの能には当然演能本はなく、新しく書き下ろす必要があった。

近年、能の世界にも斬新の氣が濃く、埋もれたままの能の復活、新作能の発表などと地殻変動が起きつつある。二年前にも復曲「布留(ふる)」を手がけ、これで二曲目の浄本をつとめたことになる。子供の頃謡曲を習ったことがあり子方として能舞台にも立った経験があるが、依頼に応え

浄書に際して、字体や表現に進取の腐心を施した自負も何かはあるが、それは第三者の評価を待つ他はない。



## 「天牛書店」

千日前電停前 昭和32年工化卒 松井 駒治

盆休みの朝、蔵書の中に「料理のコツ」と題した元宮内庁司厨長秋山徳蔵氏の著書を見出した。職人を全うした父が昭和32年に千日前で求めたものであった。

厨房に立つ事はなかった父が何故にと考え、拾い読みした。料理で一番根本的なものは「真心」だ。これこそ千古不磨の精神だと信じる。「真心」ではあまりに抽象的と感じられる方々には一歩譲って「注意」という要素だけに絞ってもよい。材料の選択にはじまって盛りつけに至るまで細心の注意を払い、寸時も怠慢する事なく……、これが料理のコツの大本だと断じる。

①材料の選択、②自然に従う③間を大切に④道具を整える⑤加減 等などに父が共感したのである。千日前からの市電の座席で本書をひらいた父の姿を想像し、思わぬ供養をしたつもりになった。



## 都工を巣立った頃

昭和27年建築卒 田中 瑛也

私が都工を巣立ったのは昭和二十七年、その前年にサンフランシスコ平和条約調印により日本は主権を回復し安保条約によるアメリカ軍駐留、朝鮮戦争による国際的軍需景況で高度成長時代の第一歩を踏み出した年であった。現実での就職活動はさほど楽では無かったと記憶している。それよりも興味を惹くのは昭和と云う時代の終りと同年に私の少年時代の日々を楽しませてくれた浪速の野球狂のアイドル「南海ホークス」の名が、そして、ライバル球団「阪急ブレーブス」が消えた事である。一塁一飯田、二塁一安井、三塁一山本(鶴岡)、遊撃一木塚の百万弗内野陣、真空管のガタガタラジオから雑音と共に流れる放送に一喜一憂したものだ。当時、歌謡界での花形スター美空ひばり、江利チエミ、雪村いずみのトリオの歌に飽きることもなく聞き惚れた。そのひばりも去年世を去った。若返りと云われる昨今、自己の人生に投影した社会の変遷に目に見えぬ必然性をそこに感じる。

今回は紙上展覧会という企画で二名の方に書と版画を出して頂きました。今後も続けたいと思っております。趣味・本職に関わらず何でもお寄せ下さい。コピーや写真で送って頂ければ結構です。その内、場所を借りてちょっとした展示会もしたいと思っております。出してみようという方も一報下さい。この所懐かしい思い出話が多いですが趣味の話、仕事の話等何でも受け付けておりますので原稿、情報等どんどんお寄せ下さい。(S47 西口)

編集後記